

第V表 猶子事由別の教育機関の配分(事由の一年間の児童を100とした百分比)

教育機関	二七年度			二六年度			二五年度			二四年度			二三年度		
	家庭	小学校	特殊施設	家庭	小学校	特殊施設	家庭	小学校	特殊施設	家庭	小学校	特殊施設	家庭	小学校	特殊施設
猶子事由	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
核	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
発育不良	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精神機能遅滞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
身体的障害全体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精神的障害全体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

学校などへ行く者も多くなっている。また免除児童は、後者精神的障害の要因にのみ見られる。

第V表のごとく、猶子児童の出生順位は末子が三九・七%で首位を占めている。このことは、少くとも猶子児童の次の出生が控えられていることを示していると考察される。

紙面の都合上、猶子事由を惹起した時期、生活環境の類別、保護者の職業の類別などについては、集計結果を割愛する。

七才女兒の予後診断

お茶の水女子大学 平井信義

森脇多恵子

序

私たちはかねてから、女兒の発育の将来は、だいたい何才位の時に予測しうるかについて、非常に興味を持っていた。そして就学する頃には将来の見通しがつくのではないかと推測してみた。そこで、このような推測が、どの程度まで妥当であるかについて調査するため、昭和二年より身体検査を行った二つの女子の学校、すなわち幼稚園から専門学校までこれらの学校の身体検査表を整理することによって、

その体測値から、目的を達しようと努力した。

方法

実際に着手してみると、幼稚園から専門学校と続く例数は非常に少いので、残念ではあるが、統計的に処理して行く上で、七才と十七才について、その相関々係を求めることにした。そこで七才時の身長、体重、胸囲を昭和十年度全国平均を基準として、適当な巾をもたせて、七段階に分け、その十年後すなわち同一人が十七才になった時どんな結果になっているか、七才の場合と同様に昭和二十五年全国平均を基準にして、七段階にわけた。

結果

一、身長、上記の方法によって、七才時にある段階にあった女兒が、十七才ではいかなる段階にあるかを三七〇例について分布図をつくり、その相関を求めると同時に、相関図を書いてみた。その結果、危険率五％で、相関係数は、〇・六一となり、七才時に、上位の段階にあった女兒は、十七才においても、上位の発達段階にある場合が多い。このことについて詳しく検討した。各々の百分率をとって見たが、これによると、七才時に段階①すなわち最上位の段階にあったものは、十七才で最上位の段階にある場合が五十六％である。また七才で最上位の段階にありながら十七才になって下位の段階に落ちてしまう場合は皆無である。

七才時に、段階④すなわち中位だったものは、十七才においても、段階③④に入る場合が多く、六十五％近い。七才時に段階⑦すなわち最下位の段階にあったものは、十七才で、段階⑤に入るものが一番多く三十八％で、段階①②に入るものは皆無であった。

二、体重・身長の場合と同様に、三七〇例について、分布図をかき相関係数を求め、相関図をえがいてみた。それによると危険率五％で、相関は〇・四六となり、七才時に上位にあった女兒は、十七才においても、だいたい上位の発達段階にあると云える。また七才時に下位の段階にあったものは、十七才になっても、だいたい下位の段階にあると云える。七才時に、段階①にあったものは、十七才で、六十三％が、段階①に属する。最下位になる場合は、皆無である。段階④にあったものは、十七才でも、中位、すなわち段階③④⑤に在るものが七〇％に達している。七才時に、段階⑦であったものは、十七才で、段階①になる場合は皆無で、最下位が三十二％近くであった。

(三)、胸囲、身長、体重の場合と同様、三三八例について、統計的に処理した。それによると危険率五％で、相関は、〇・二二となり、身長・体重の場合に比べると相関図における二線間の角度も広く、非常に相関が低い。この程度の相関では、七才時と、十七才の関係を求めることはできない。

これを詳しく検討したが、七才時に、最上位、すなわち、段階①にあったものが、十七才において、段階①にある場合は、三十八％で、十七才において下位の段階にある場合は皆無であるという以外には、どの場合も、二〇％内外で散在してしまつた。そこで、胸囲においては、何時頃から予測しうるかをみるため、五年後の十二才と十七才の相関を求めたが、五％危険率で〇・三一で、この年令においてもなお予後診断は不可能とされた。

結論

以上の結果から身長・体重・胸囲を通じて、七才時最上位にあったものは、十七才においても、なお上位の発達段階にあるということ、いいかえると、就学時に大きかった女兒は成長した後も、なお大きいという事が、はっきり結論づけられる。また七才時に下位の段階にあるものは、十七才でも、なお下位の段階にあるかということについては、上記の場合ほどはっきり結論づけられない。しかしながら、七才時に非常に小さかったものが、十七才で非常に大きくなるということは皆無で、よい場合でも中どまりである。身長・体重・胸囲、個々に検討すると、身長は比較的早期において、その将来を予測することができるが、体重においては、七才位では無理であり、十二才になっても、まだ将来を推測することはむずかしい。胸囲においては、個々によつての発達型が非常にことなり、ある時期には、非常によい発達段階にありながら、その後は、極めてかん

まんななる場合などがあり、個人差の問題はゆるがせにできない。

日・米・独の小児の發育の比較からみたわが国の小児の發育向上に関する指針

お茶の水女子大学 平井信義

千羽喜代子

1、序文

欧米人の体位と日本人の体位を比較すると、そこにはかなりの違いのあることは既知のところであり、その違いがどのような具体的な事柄としてあらわれているかについては、多くの研究がなされている。そこで、その違いが何歳ごろに現われるのか年令的にしぼってみると、船川、平井、峯川の諸氏はいずれも幼児期にそのきざしがあらわれると報告している。そこで私どもはさらにそれを確認するため、①その違いのあらわれる年齢的考察を試みると同時に②幼児期に違いがあるとすればそれは身体の中の部分に現われるのか、均衡 (Proportion) の比較を、③ついで、Proportion に違いがあるならば、それはいかなる要因に基づいているのか、これら各項目につき、日・米・独三国の文献による比較考察を試みた。

2、研究資料

アメリカ—一九三〇年から一九四六年までの Iowa 州における調査

ドイツ—一九二七年、一九三二年、一九四七年の Hamburg

における三〇万人以上の平均値

日本—昭和二五年度補正、国立公衆衛生院による統計値

(一九五〇年)

その他 Simmons, K. 佐野氏、小泉氏、豊田氏の調査を前記の資料に補った。

3、総括

a 身長、体重の比較

身長、体重ともに累積増加率を算出し、その比較を行った。

(I) 身長、米と独の身体發育は全体を通じて米が平均男児四・八% 女児二・〇% 凌駕している。しかし、日は独に比べて平均一四~一五% 劣っている。これをさらに年間増加率によって比較すると、この違いの著しくあらわれるのは一歳~三歳であり、三歳~六歳がこれにつづく。六歳~一歳はほぼ一致の値を示している。身長の發育の違いが幼児期前期にあらわれること、とくに二歳が著しく、独・米のまゝの増加を示すにすぎない。青年期のとくに女子が各国によってその増加率に違いのあることを附記しておく。

(II) 体重 米は独よりも男児五・五%、女児二・四% 優っている。

しかるに日は独よりも一~一四%の低下を示す。年間増加率独・日の比較をすると、身長ほど著しくはないが、この違いの大きくあらわれているのは、男児九~一二歳、一二~一五歳、女児六~九歳、九~一二歳であった。

b 体型の比較